

## 市史講座第9回ミニレポート

12月8日(土)第9回の講座が開かれました。

第1部：「松江市の植物」(講師:松江市文化財保護審議会委員 杉村 喜則 先生)



杉村先生は、地域の自然林は、その土地の立地条件と、温度、水分などの条件が加わり決定されるものと話され、松江地域ではどのような自然林が主流をしめているか、実物の植物の枝を示しながらユーモアいっぱい、出雲弁で講義をされました。

年平均気温 13°C位が落葉広葉樹林と常緑広葉樹林生育の境とのことで、13°C位の気温の差が生じる山の高さは 600m位が目安とのことです。600m 以下に常緑広葉樹林が生育し、600m 以上の山に落葉広葉樹林が生育するのです。

600m 以下の常緑広葉樹林では緩やかな斜面にはアカガシ林、スタジイ林、沢や急斜面にはウラジロガシ林が群生します。600m以上の落葉広葉樹林の緩やかな斜面にはブナ林が育ち、沢や急斜面には

サワグルミ林が育つとのことです。

松江市域には天狗山の 601mがあるのみで、その他、朝日山、枕木山、星上山等、何れも 600m以下の山ですから、松江市域は常緑広葉樹林群の山々ということです。人の手が加わると常緑樹が減り、落葉樹が増てきます。以前はこの山々と人間が燃料や材木や、植物採取などを行って共生しあったのですが、近年、人間との関わりがなくなった山の植物系には変化が見えるとの事です。

さらに日本の暖温帯と令温帯の境界は年平均温度 12 度～15 度の地で、松江市域(島根県)は対馬暖流や中国山脈によって日本の中で暖温帯に入り、南の植物の北限地とする植物、ハマユウ等が生息していること、和名ナツハゼが松江市内の橋南、橋北、宍道湖沿岸地、大東、仁多でそれぞれ呼び名が違うことを微妙な出雲弁と自身の体験を交え話されるなど楽しい講義でした。

## 第 2 部 : 「江戸時代の松江の建造物」(講師:松江市文化財保護審議会委員 足立 正智 先生)



足立先生は、現存例をあげながら、江戸時代の松江の建造物の特徴をわかりやすく解説されました。ただ、建物の創建年代を特定するには、棟札や祈禱札、家相図などが有効だがほとんど残されていないこと、また、木造のために部材を更新して長持ちさせたり、生活の変化に合わせて改装してきているので、建物そのものから創建年代を推定することも難しいと述べられました。

武家屋敷では、家老の有沢家(2500 石)の間口は約 42 間、御用人役岩佐家(140 石)だと約 12 間と、その身分によって大きな違いのあること、町家は、二階は建前上物置であり隣同士の棟続きが多いが、北堀町の現存例では、屋根勾配が緩やかで2軒ぶんが1軒となっていることなどを紹介されました。また、稲積に残る 250 年前の豪農の母屋には、養蚕の痕跡が残されていることなど、興味深い事例が紹介されました。